ぼくの七日戦争

5年　男子

図書室のおすすめコーナー。ぼくは「ぼくらの七日間戦争」というタイトルが気になった。一週間の戦争。ぼくら。不思議だな、子どもは戦争をしないはずでは。次々と頭の中にはてなが浮かんだ。

表紙には、九人の子ども。ぼくよりもちょっと大きいけれど、やっぱり子ども。開放区、初めて見る言葉だった。大ベストセラー。たくさんの人が読んでいるんだ。ぼくは表紙を見ただけで引きこまれていった。いざ読み始めると、さらに夢中になった。

大人にあやつられていると気づいた中学生が、大人と戦う話。自分たちの気持ちを理解してほしくて戦う。戦い方は、迷路やクイズ。ゆうかいされた子どもを謎解きを使って救出。宇野という男の子は、ちょっとぼくに似てる。好きなものはちがうけれど、気が小さくて背も小さい。でも、物知り。宇野がクイズで活やくしたとき、ぼくはなんだかうれしかった。

大人がいろんなことで引っかかって面白かった。迷路の仕かけで、校長先生の毛がぬけたところは声を出して笑った。迷路に入った大人が、トマトをぶつけられたり、ペンキをかけられたとき、ざまーみろと思った。

ウクライナとロシアは戦争をしている。何で戦争してる。ロシアはウクライナにもどってほしい。ウクライナはもどりたくない。子どもたちはなぜ戦争をしてる。大人の言いなりになりたくないからだ。子どもはまだ小さいから大人の言うことにしたがうのが普通。ぼくが今のまま小さければ、したがうのだろう。でも、中学生になったらどうするのかわからない。みんなの気持ちが少しずつ分かってくる。

なぜ大人にしたがわなければならないの

か。今はまだないけど自分なりにやりたいことができたとき、指図されるとぼくはどう思うだろう。きっといやだと感じるだろう。大人も昔は子どもだったから、言うことを聞かせればかん単だと考えているだろう。でもぼくはぼく。大人の言いなりにはなりたくない。これから大人と気持ちが合わないとき、ぼくはどう戦ったらいいのだろう。気持ちが合わないと戦争になる。ぼくはどうやって反抗しよう。大人の言いなりになる。それはいやだ。戦車を作る。迷路にしようか。

そんなことを考えていると、友達とけんかしたときのことも思い出した。どうしてわかってくれないのってすごくむかついた。頭が熱くなって汗が出た。友達は何を考えてるの。ぼくは何回も気持ちを伝えた。すると、友達も気持ちを教えてくれた。うれしかった。このやり方がぼくのやり方ではないか。

ぼくはこれからも何かあれば気持ちを伝えようと思う。何回も伝える。バカにされたら、ムカついてなぐってしまうかもしれない。でもそれは、ぼくだんを落とすのと同じ。力を使ってしまえば、本当の気持ちは分かってもらえない。だからぼくは何回も言葉で気持ちを伝える。これがぼくの戦い方。

書名	ぼくらの七日間戦争
著者名	宗田理
出版社	ポプラ社